



## 本物のドキュメンタリスト

— 土井敏邦(映画監督)

## 重量級の存在感

— 小原啓(テレビディレクター)

我妻和樹監督『願いと揺らぎ』は、震災時にそこに居合わせてしまった若い作り手自身の想いを率直に吐露する側面を持ちつつも、それが丹念な民俗学的観察のまなざしと

溶け合することで稀有な傑作となつた。本作を通して私たちは、「絆」と呼ばれたものが具体的に何だったのかを教えられるだろう。

## 震災から6年後の 決定的な成果

ではないだろうか。

— 三浦哲哉(映画評論家)

宮城県南三陸町の小さな漁村「波伝谷」。その震災までの3年間の日常を追ったドキュメンタリー映画『波伝谷に生きる人びと』から1年後が舞台の本作では、映画の冒頭、荒涼とした波伝谷の風景が映し出される。

津波によって集落が壊滅し、コミュニティが分断された波伝谷では、ある若者の一声から地域で最も大切にされてきた行事である「お獅子さま」復活の機運が高まる。それは先行きの見えない生活の中で、人びとの心を結びつける希望となるはずだった。

しかし波伝谷を離れて暮らしている人、家族を津波で失った人、さまざまな立場の人がお獅子さま復活に想いを寄せる一方で、集落の高台移転、漁業

の共同化など、多くの課題に直面して足並みは一向に揃わない。震災によって生じたひずみは大きく、動けば動くほど想いはすれ違い、何が正解なのかも分からぬまま、摩擦や衝突を重ねお獅子さまは復活する。

それからさらに時は流れ、仮設住宅から高台へと居を構え、波伝谷で生きることを決意した若者は、改めて当時の地域の混乱と葛藤を振り返ることになる。

学生時代に民俗調査で波伝谷を訪れ、2005年からお獅子さまを撮り続けてきた監督が、ともに迷い、もがきながら、それでも復興に向けて歩み続けた人びとの「願いと揺らぎ」を鮮烈に映し出したドキュメンタリー。

震災が生んだひずみを乗り越え、土地とともに生きていく。2005年から続く12年の記録が実を結んだ震災映画の大いなる到達点。



製作・配給:ビーストゥリー・プロダクツ 監督・撮影・編集:我妻和樹 プロデューサー:佐藤裕美 宣伝:佐々木瑠郁  
2017年/日本/HD/カラー・モノクロ/16:9/147分

2018年4月28日(土)~5月11日(金)

仙台セントラルホールにて13:00~  
毎日監督舞台挨拶、ゲストトーク有り  
前売り1,300円 一般1800円/学生1,500円/シニア1,100円/高校生以下・障害者1,000円

仙台セントラルホール

022-263-7868 クリスロード商店街

ドコモショップ向かい

仙台市青葉区中央2-5-10 桜井薬局ビル3F

前作『波伝谷に生きる人びと』リバイバル上映決定!

4月21日(土)~27日(金)

一般1,500円/学生・シニア1,100円  
高校生以下・障害者1,000円